

ハエの縄張り

片野修

動物の社会構造などと言うと、なにかむずかしいイメージを想わせる。順位制や縄張り制などがよく知られた社会構造であるが、それらをしらべるためには、人手の加わっていない山奥にでも出かけなければならないような気にさせられる。この分野を専門としていた私にしても、ごく最近までそんな感覚をもっていた。

ところが先日、私はこれ以上ないほど完璧な縄張りを、自宅で寝ころんでいるときに発見した。野原で鳥の縄張りを観察するためには、双眼鏡が必要だ。湖の魚の縄張りをしらべるためには、水の中に潜らなければならない。アザラシやクジラの動きを明らかにするためには、発信機をつけたり、ヘリコプターを使ったりして、何十キロも追跡しなければならない。しかし、私は寝ころんだまま、その動物が縄張りを作っているのを一つの視野の中に収めることができた。

実は、このときまで、私はハエが縄張りを作ることを知らなかった。淡水魚を専門とする私は、昆虫にはくわしくない。ハエはただ汚いものに集まって、適当に繁殖するものだと思っていた。ときどきゴミを捨て忘れていると、多くのハエが羽化することがあったが、たいていすぐに殺してしまったので、その社会まで観察するゆとりがなかったのかもしれない。

それは3月初めの頃だった。こたつに入って寝ころんでいた私の上、フローアから1.5mのあたりに、二尾のハエが飛びかっていた。しばらくハエを見なかったから、どこか外から入ってきたか、部屋のどこかで羽化したのだろう。キンバエやギンバエではなく、少しスリムで小さめのハエだった。

それぞれのハエは1 m²ほどの広さを活発に飛びかい、両者の縄張りの境界近くで接近すると、その微妙な位置に応じて一方が他方を攻撃した。少しでも自分の縄張りの中心に近い方が優位であった。しかし、攻撃された方も、追われながら自分の縄張りの中心に近づくと、逆に相手を攻撃し返すのであった。この縄張りのパターンは、けものや鳥や魚にも共通する基本形である。

ただし、けものなどに比べると、縄張りの必要性というか、この場所に縄張りを作る理由がよくわからなかった。けものは食物やすみかやメスの周りに縄張りを作る。しかし、私の部屋におけるハエの縄張りは、空中の一部分になんとなく構えられたものだった。その食物は台所周辺にある。だから、ハエのなわばりは食物をめぐるものではない。おそらくハエは、いつかあらわれるであろうメスが、縄張りを訪れるのを待っていたのだろう。

繁殖期を迎えた動物では、オスが縄張りを作ってメスを待つことがある。メスがあらわれる場所が、ある木の一部分であったり、水たまりであったりすれば、その上で待てばよい。しかし、いつどこにメスがあらわれるのかがわからないときには、オスは自分たちで集まって、そこにメスを引き付けようとする。鳥では、レックと呼ばれる繁殖場があり、そこで美しい色彩をしたオスたちが派手なディスプレイを繰り返し、また鳴き合ってメスを引き付

ける。1.5mの高さで飛び回るといのは、ハエのメスにとっても見つけやすいと考えられる。

しかし、なかなかメスはあらわれなかった。気温が低くなったり縄張り争いに疲れたりすると、ハエは近くの壁にとまって休息した。しかし、毎朝私がファンヒーターをつけて部屋を暖めると、2匹のハエは必ず、縄張り争いを繰り返した。

そうこうしていると、ハエの数が3匹、4匹と増えていった。4匹のハエはいずれも縄張りを作ったが、以前から縄張りを守っていた2匹の縄張りは狭くなり、以前より混みあった状態で、4匹が攻撃し合っていた。

4匹のハエは、一分間に10回くらいの頻度で攻撃を引き起こし、ときには4匹が同時に争うこともあった。ふつう縄張りは、そのメンバーが固定し慣れてくると、争わなくなると言われている。しかし、うちのハエたちは、時間が経過しても同じように闘っていた。学習しないのであろうか。また、不思議なことに、広い縄張りを持つとすればいくらかでも持つのに、部屋の一部に集まって縄張りを作っていた。おそらく、このオスたちは、どこか部屋の片隅でその動きを見ているかもしれないメスのハエに対して、自分の強さや縄張りを守る力を誇示していたのかもしれない。動物のメスは、その子を育てるために、強く、よい縄張りを持つオスを繁殖相手として選ぶ傾向がある。メスはまだいないのだと私が教えてあげればよいのだろうが、彼らにはそれを知ることはできない。

注釈：このエッセイは私が若い時にノートに記録していたもので、現在私の部屋でハエが発生しているわけではない。私にはハエの雌雄はわからなかったもので、縄張りを守っていたのがオスかどうかは確かではない。そして、このハエたちがどうなったのか、メスが現れて交尾したのか、あらわれずにハエたちは消えていったのかも、今となっては思い出せない。